

第 22 回 土器の底からわかること—土器底部圧痕—

大昔、縄文時代や弥生時代には、もっぱら土器を用いて煮炊きをしていました。こうした土器の底には、土器づくりの際に敷いてあった敷物や、たまたま下敷きになったモノの痕（圧痕）が残っていることがあります。

1 は上高津貝塚から出土した縄文時代後期前葉～中葉の土器で、敷物の跡がくっきりとついています。この敷物はおそらく、幅 2～3mm の竹ヒゴを、「飛びござ目」という技法で組んだものです。土器製作の際、コースターのように底に敷いたと考えられます。つくりかけの土器の底部が、地面にくっつかないようにしたのでしょう。また、模様付けなどの際に、土器を回転させるためにも役立ちます。

2 は、神立平遺跡から出土した縄文時代晩期の土器です。半分以上が欠けているため分かりづらいですが、2mm ほどの太い葉脈と、そこから枝分かれする細い葉脈が確認できます。恐らく、大きな葉っぱの裏面に粘土をのせて、土器の製作を行ったのでしょう。葉っぱのつるつるした面を地面側にしていることから、やはり土器を回転させることを考慮していたのでしょう。

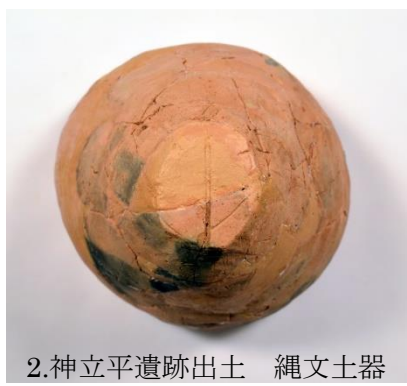
3 は原田北遺跡（第 2 次調査）で出土した、弥生時代後期の土器です。脱穀する前の、籾殻がついた状態のコメの痕が確認できます。土器づくりの際に、たまたま下敷きになったのでしょうか。土浦市でもっとも古い、米づくりの証拠です。

このように、土器底部圧痕には当時の土器製作技術や生業に関する情報が残されています。近年では、こうした圧痕にシリコンを流し込んで型取りし、顕微鏡で観察する手法が開発されました。この手法によって、縄文時代にマメが栽培されていたことなど、新たな事実が明らかになっています。当館には、これまで調査されてきた豊富な考古資料が収蔵されていることから、これらの資料の再検討によって、新たな発見が生まれるかもしれません。

※本稿は平成 28 年度『広報つちうら』10 月上旬号「未来への伝承」に掲載したものを加除修正したものです※



1.上高津貝塚遺跡出土 縄文土器



2.神立平遺跡出土 縄文土器



3.原田北遺跡出土 弥生土器